

殿様の舟旅

—酒井忠以 淀川を下る—

高速道路も車もなかった江戸時代、日本の交通は川舟による河川交通によって支えられていました。この背景には、江戸時代の大名が、年貢米や城・城下町の建築資材の安価かつ円滑な輸送手段として、川舟に目をつけたことがあります。江戸時代初頭の日本では、全国各地の大名によって、舟路や荷物を積み下ろす河岸の設置、荷物の保管場所となる蔵や舟の乗り手の確保など、河川交通に不可欠なインフラ整備が行われました。その結果、川舟は物資はもちろん、人の日常的な移動手段にもなったのです。今回紹介する淀川の川下りもその一つです。

さて江戸時代、姫路藩をはじめとする各大名も、参勤交代や帰城など折に触れて淀川での舟旅を楽しんでいたといわれています。しかし、一八世紀末の姫路藩主である酒井忠以(ただぎね)に限っては、記録に残る限り一度しかこの淀川の川舟を利用していません。この理由を、彼の記した日記『玄武日記』(城郭研究室所蔵)から見ていきましょう。

時は安永6年(1778)。江戸から姫路へ帰城の途にあった忠以は、12月4日に京都伏見に到着しました。ここで昼食をすませた忠以は、未の時刻(現在の時刻で13時から14時)に川舟に乗り込み、淀川を下って一路大坂を目指します。

ここで注目されるのが、このとき伏見に集められた舟に関する記述です。忠以は、「(伏見に集



姫路藩の川御座舟(屋形部)

められた舟をみながら)此舟ことごとく吾船なり、難波の亭より船の奉行種村又右衛門漕よせける、船の数四十八艘、吾船を合せて五十艘なり 五百石つみより百石つみの船」と述べています。つまりこのときの忠以の目の前は、わざわざ難波から運ばれた姫路藩の500石から100石積みの川舟50艘で埋め尽くされていたわけです。もちろんこの当時、エンジンはありませんから、舟を川の流りに逆らって伏見まで運ぶためには、舟に縄をかけ、川岸から人足が舟を引く必要があります(これを「曳き舟」といいます)。50艘もの忠以の舟の曳き舟には、相当な人数、労力、日数が費やされたでしょう。また幕末の姫路藩主酒井忠績(ただしげ)が姫路藩の故事をまとめた『姫陽秘鑑26 礼格2』(城郭研究室蔵)によれば、藩主の乗船にあたっては、御船手が事前に大坂・伏見入りして御雇の屋形舟および雇水主の吟味まで行ったともあります。藩主の淀川下りは、大変手間とお金のかかるものだったのです。

このとき忠以が乗船していた舟は、「御座舟」とよばれる特別な舟です。忠以の淀川下りに実際に利用されたものかはわかりませんが、姫路藩の川御座舟の屋形部分については、神戸市中央区にある「相楽園」の園庭にいまも保存されています。この川御座舟の建造年は天和2年(1682年)から宝永元年(1704年)の間と推定されており、木造2階建、建築面積は 43.74平方メートルの広さを持ちます。この船屋形は、川御座舟としては唯一現存するもので、その希少性と歴史的文化的価値の高さから1953年(昭和28年)に国の重要文化財にも指定されています(外観は、相楽園でいつでも見学することができます)。なお、後に忠以が伊勢桑名で川下りをした際、忠以の他に表用人1人、側用人3人、小姓4人、小姓供番4人、案司奉行1人、小納戸1人、大目付1人、側医者1人、表医者1人、側小僧1人、奥坊主1人、坊主頭1人の21名で舟に乗船していることから、相楽園にある川御座舟にも同程度の人員を収容できたと考えられます。

当世風に言えば、忠以の淀川下りは豪華クルーズ船での船旅にもなぞらえることができるでしょう。では、忠以の淀川での舟旅を以下でみていきましょう。忠以を乗せ伏見を出た舟は、夕霧の中穏やかに進みます。しかし淀橋の水車を過ぎた辺りで西風が激しく吹きつけ、舟は何度も川州や沢に乗り上げてしまいました。舟子も舟を川に戻そうとはげみますが、西風が激しく作業がはかどりません。そのような中夜も更けたため、忠以は自室の戸を閉め、しばし眠りについていました。

『玄武日記』には、このとき忠以の乗る舟が激しい西風に煽られ、まさに転覆するという夢をみていたことが記されています。夢の中で忠以は歌を詠みますが、するとたちまち北風が吹き、舟は転覆を免れました。ここで忠以は目を覚ましています。このときの北風をもたらしした歌について、忠以は下の句が「吹けや八幡の峯の神風」であった、と記しています。夢から覚めた忠以は、「あやしの夢」を見た側御供に夢の内容を語り、実際の様子を伺うべく舟のへりに出てみます。すると今まで西風が吹いていたところに、本当に北風が吹きつけてきたのです。忠以も「帰す帰すもあやしの夢なり」と述べ、京都八幡山(石清水八幡宮のある山です)の方に向かって思わず手を合わせました。忠以は、さぞ八幡の神威を感じたのでしょう。

この体験ですっかり目が覚めてしまった忠以は、真夜中にもかかわらず9名の家臣をあつめて連句をはじめました。連句をするうちに、枚方で夜が明けます。ちなみにこの枚方は、客船に船をつけ、飯、酒、汁、餅などを商う舟、通称「くらわんか舟」が有名ですが、さすがに忠以の舟に食事を売りつけたという記載は残されていません。そうするうちに、舟は翌6日未の下り(現在時刻15時頃)に姫路藩の蔵屋敷がある大坂常安橋によく到着しました。実に丸一日に及ぶ長旅となってしまいました(通常は半日程度で到着します)。大坂に到着した忠以は、一息つく間もなく大坂城代や町奉行、出入りの町人らと面会し、その後側の者をつれて天王寺参り、有名な料亭である浮瀬の茶店、からくり見物などを楽しみ、翌7日には再び姫路へむかって出発したのです。

さて、この旅路から約半年後、忠以は参勤するにあたって陸路で伏見に向かいました。そして淀川の辺りを通りかかった際、「去年見てし浮洲もワかす淀川のよとミもあへぬ五月雨のころ」と歌を詠んでいます。昨年とは打って変わったような淀川の様子を見て、昨年の舟旅をしみじみと思い返したのでしょう。このようにみると、以後忠以が淀川の川下りを避けたのも、強風に苛まれ、八幡の神威を感じ、思わぬ長旅となった、安永6年の舟旅の苦い記憶があったからではないか、と推測することができます。

〈M〉

